人はどのようにして嘘を見抜くのか
―嘘についての信念との乖離―

社会学研究科社会心理学専攻博士後期課程３年
滝口　雄太

要 約

虚偽検出に関する研究では，情報の送り手の言語的行動および非言語的行動を受け手が判断するようなパラダイムが頻繁に用いられている。こうした研究の背景には，嘘をついている人は不安や緊張を感じているために，視線を逸らすような行動を表出するといった前提が見られる。本研究は日常場面において嘘を知覚する状況を考慮し，言語的行動および非言語的行動のみに限らない手がかりに関する基礎知見を収集することが目的であった。加えて，嘘についての知覚を喚起させる手がかりは，人が抱いている嘘の信念による影響を受けているのか，あるいは，パーソナリティの違いにより基準とする手がかりが異なるのかを検討した。本研究の参加者（$N = 272$）に対して，信頼感や猜疑心，虚偽手がかりについての信念，他者の嘘を知覚した出来事について自由回答式の回答を収集した。先行研究と一致して，視線や身体の動きのような非言語的行動についての信念が頻繁に報告されたが，他方では「感じの悪さ」のような統合的な手がかりが嘘の検出に役立つと考えている者も多く見られた。さらに，実際に嘘を知覚させた出来事に関する分析により，直観的思考や他者の非言語的行動，第三者からの情報が，他者の嘘を知覚させていることが明らかになった。虚偽知覚を喚起させる要因として言語的・非言語的行動の存在は重要であり，このことは顕著に見られた嘘の手がかり信念の利用係数（Hartwig & Bond, 2011）からも支持されていた。

キーワード：嘘，猜疑心，嘘の手がかり信念，虚偽知覚手がかり

はじめに

人は他者とコミュニケーションを取る中で，しばしば嘘をついている。村井（2000）は，大学生および大学院生に1週間日記をつけることを求め，他者との相互作用の中でどのくらい嘘をついているか調べた。その結果，他者との相互作用の3回に1回の頻度で嘘をついてい

ることが明らかになり，嘘を含むコミュニケーションはありふれたものであると考えられる。このように嘘を利用しているにも関わらず，嘘をつくことに伴う印象には異なる印象が取り上げられている。一般的に，「嘘つきは泥棒の始まり」という諺に示される通り，多くの人は嘘を悪いものとして否定的に捉えている。文化によらず，ほかの人を欺いてだますことは，道徳的に逸脱した避けるべき行動としてみなされている（Bok, 1978; Backbier, Hoogstraten, & Terwogt-Kouwenhoven, 1997）。その一方で，「嘘も方便」という諺があるように，嘘のネガティブな側面を認めつつも，時と場合によっては物事や社会関係を円滑に進めるポジティブな側面を持っていると考えられている（DePaulo, Morris, & Sternglanz, 2009）。このように，嘘は否定的側面を内包していることを認めつつ，他者とのコミュニケーションが必要な社会生活上で重要な機能を担っている。

心理学領域では，様々な点から嘘にアプローチを試みている。その中でも，特に多くの研究者が注目していることは，「どのようにして嘘を正しく見抜くことができるか」に資する知見の提供である。例えば，犯罪が関与する状況などにおいて，容疑者が嘘をついているかどうかを正確に検出できることが重要と考えられている。そのため，嘘の指標となる手がかりを探索する研究が多く見られ，虚偽検出の有効性に関する研究が主流であることがわかる。現実場面において，虚偽検出は警察組織などの専門家が職務上，嘘を見抜く蓋然性のある状況で使用するものであり，客観的な証拠に基づいて反応の相違を解釈することが可能となる。犯罪捜査で用いられる隠匿情報検査法（Concealed Information Test）は，記憶を隠しているときの認知過程に焦点を当てており，客観的情報に対する特異的な反応を観察している（廣田・小川・松田・高澤, 2009; 松田, 2016）。

社会心理学の中では，Ekman and Friese（1969）を端緒に，嘘に関する研究が行われるようになってきており，嘘をついているときには，緊張感や不安と関連した印象をもつ非言語的行動が表出されることが明らかにされた。同様に，Zuckerman, DePaulo, and Rosenthal（1981）は，本当のことを話すときと比べて，嘘をつくときに顕著に表出される言語的行動および非言語的行動があることを示した。しかし，嘘に関する研究が蓄積されてくると，嘘をついていることが明白であるような指標はないと結論づけられている（Vrij, 2008a）。このことに加えて，嘘をついている人は言語的行動や非言語的行動に何らかの特徴が表われるという思い込みを人は抱いていることが示されている。例えば，嘘をついている人は見抜かれる不安を感じているために，視線に落ち着きがないと考えられている。そして，このような特徴をもつ人を正直に話していないと判断してしまうのである（Stiff & Miller, 1986）。多くの言語的行動や非言語的行動は嘘の手がかりではないことが明らかにされているにも関わらず，嘘との関連があると信じられている手がかりを観察した場合には，その手がかりから虚偽判断が行われてしまうのである（Hartwig & Bond, 2011）。

それでは現実場面においても，人は根拠の弱い手がかりのみに基づいて虚偽検出を行って

いるのだろうか。実際には，自分が嘘をつくことに比べると，他者が嘘をついていると感じる頻度は少ないことが示されている（村井, 2000）。実験室場面ではない嘘を対象とした研究では，実際の虚偽検出が様々な検出の手法を組み合わせて行われており，嘘に関する研究は実験デザイン上の制約の影響を大きく受けていると主張されている（Park, Levine, McCornack, Morrison, & Ferrara, 2002）。具体的には，コミュニケーションの相手となる他者から，言語的情報や非言語的情報を得られるだけではなく，その状況に関して知っている事実や第三者からの情報のような手がかりを用いることもできるだろう。その一方で，嘘を判断する側にとって利用できる情報が少ない場合，嘘に関連していると人が信じている手がかり（以下，嘘の手がかり信念）は虚偽検出に対して影響力をもっている（Vrij, Granhag, & Porter, 2010）。すなわち，嘘の手がかり信念は，嘘と関連している手がかりに対するアクセシビリティを高め，実際の真偽性とは無関係に虚偽判断を行うことを促してしまう。しかしながら，現実場面の虚偽検出について考慮した際、ある手がかりが嘘に関連しているという信念は，虚偽検出の認知過程でどのような役割をもつのかは検討されていない。虚偽検出が言語的行動や非言語的行動に基づいて判断されるとすれば，ある特定の言語的行動や非言語的行動が嘘と結び付くという考えをもっていることにより，これらの嘘の手がかり信念を支持するような行動を実際に探索すると予想される。ここで問題となるのは，嘘の手がかり信念と一致した行動の手がかり探索が判断者の知覚状態により調整されるかどうかである。すなわち，嘘の手がかり信念と一致した行動を表出したことが虚偽判断の根拠となるのは，情報の送り手に対して受け手が疑念を抱いているときと考えられる。実験室場面では，虚偽検出課題のデザインにより，嘘の手がかり信念と疑念の程度の関係について検討することは難しい。したがって，日常場面における嘘を理解しようとした場合，実験室場面では捉えることのできない状況を考慮する必要がある。

目　的

嘘をつくことは日常的にありふれたことであり（DePaulo, Kashy, Kirkendol, Wyer, & Epstein, 1996），社会生活を調節している（Vrij, 2008a）。しかし，あらゆる嘘が社会的機能の維持を目的としているとは限らない。自己利益の追求のように利己的な嘘も存在しており，これらの悪意を含んだ嘘を察知して検出することは重要である。人の虚偽検出能力についてのメタ分析（Bond & DePaulo, 2006）によると，人はチャンスレベルをわずかに上回る程度でしか嘘を見抜くことができないと示されている。

虚偽検出の正確性の低さを説明する理由のひとつは，嘘をついているときに表出される手がかりについて，人が誤った信念を抱いていることが指摘されている（Park et al., 2002）。加えて，日常場面では嘘よりも真実の方が接する機会が多く，嘘の生起頻度を低く見積もってしまうことも示されている（Levine, 2014）。したがって，本研究では，これまでに明ら

かにされている嘘の手がかり信念に関する知見を概観し，日常場面で使用される虚偽検出や判断者の虚偽知覚との関係について述べる。その後，文献調査を踏まえて，嘘の手がかりについて抱いている信念や日常場面の虚偽検出，虚偽知覚に関する調査を行い，日常場面における嘘の手がかりの解釈および虚偽知覚についての素朴な理解を深めることを試みる。

嘘の手がかりの研究手法

虚偽検出に関する研究では，真偽判断の対象となる発言は実験者により操作されている場合が多い。そして，これらの発言には様々な言語的行動や非言語的行動が伴っており，送り手が示す情報に基づいて，判断者は真実を述べているときの行動や嘘の指標となる行動を見分けていくことになる。これらの結果から真偽判断のときに用いられる手がかりをマッピングすることにより，虚偽検出を行うときの意思決定を明らかにすることができる（Hartwig, Granhag, Strömwall, Wolf, Vrij, & Roos, 2011; Strömwall, Granhag, & Hartwig, 2004）。嘘を判断するときに用いる手がかり（主観的手がかり）を研究する際に最も頻繁に使用される方法は，嘘に関して抱いている信念についての自己報告を求めることである（Akehurst, Köhnken, Vrij, & Bull, 1996; Strömwall & Granhag, 2003）。例えば，言語的行動と非言語的行動に関するリストを回答者に提示し，リストにある各行動が嘘をついているときにどのくらい表出されるかを尋ねている（Colwell, Miller, Miller, & Lyons, 2006; Lakhani & Taylor, 2003; Taylor & Hick, 2007）。リストに含まれる行動は，非言語的行動に関する信念のみに着目する場合もあれば（Vrij & Semin, 1996），言語的行動と非言語的行動の両方に着目する場合もある（Strömwall & Granhag, 2003）。しかしながら，このような選択回答式のアプローチでは，研究者が選定した行動以外の手がかりについて探索することは困難である。そこで，嘘の手がかり信念を幅広く理解するため，自由回答式のアプローチを用いた研究も見られる（Marksteiner, Reinhard, Dickhauser, & Sporer, 2012）。この方法では，「人は嘘をついているときにどのように行動しますか」と尋ねることで，回答者は選択された手がかりに左右されずに回答を行うことができる。ただし，回答者が思いついた信念のみを測定しているため，この結果として得られた信念は，必ずしも人が抱いている信念の全体像を示してはいない可能性もある。

上記で述べた方法では，回答者が真偽性を判断するための手がかりを意識しているという問題点がある。自己報告に頼らない指標として，嘘の主観的手がかりを検討するために相関法による検討も行われている（DePaulo, Stone, & Lassiter, 1985; Kraut & Poe, 1980）。この方法では，情報の送り手が嘘をついたり本当のことを話したりするときに表出する行動と，受け手が行った真偽性判断との関連を調べている。例えば，送り手の表情に関するポジティブな評価と，受け手の真実性判断の間に正の相関が見られる場合，受け手はポジティブな印象をもたらす表情と真実を話すことを潜在的に関連づけていると期待される。相関法は無意

識のうちに抱いている嘘に関する考えを明らかにできるかもしれないが，回答をどのように分類するかの枠組み設定や行動単位ごとの分析を行う必要があるため，膨大な時間がかかるという短所もある。これらの嘘の主観的な手がかりに関する研究により，人は嘘をつくときに見られる行動について，誤った信念を抱いていることが示されている。

客観的な嘘の手がかり

多くの言語的・非言語的手がかりについて，嘘との関連性が調べられてきたが，実際に関連性が実証されている客観的な手がかりは少ない。最初に嘘の手がかりを包括的に検討したのはZuckerman, DePaulo, and Rosenthal（1981）であった。欺瞞的コミュニケーションを行っているときに特徴的に表出される行動を扱った研究を対象としており，19個の行動について報告された。これらの行動は嘘をついているときに生じる可能性が高く，思考や情動，心理的状態と関連すると考えられている。そして，嘘の手がかりを予測するために，覚醒，感情，認知的側面，行動統制の4つの要因を取り上げた。例えば，本当のことを話す人に比べて嘘をつく人は高いレベルの覚醒を経験していると考えられており，実際に瞳孔の拡張や瞬きの多さ，途切れの悪い発話，ピッチの高さを通して嘘が明らかにされる（Zuckerman et al., 1981）。さらに，嘘をつく場合には，嘘をつくことに関する罪悪感や嘘がばれてしまうことへの不安を喚起すると考えられており，これらの感情と関連する行動が表出されると予想される。また，嘘をつくことは認知的負荷の高い処理であり，一貫した内容になるように調整したり他者が知っている情報を整理したりする必要がある。このような認知的負荷は，反応潜時や言いよどみの増加などの行動を予測していると考えられた。その一方で，嘘をつく人は，嘘に関連するような非言語的手がかりを漏洩することを避けたり，信用できる印象を作り出したりするため，自身の行動をコントロールする傾向がある。これらの行動統制により，緊張や不安を反映した行動が見られると考えた。したがって，Zuckerman et al.（1981）は嘘をつく人が心理的に経験するプロセスを考慮することにより，このような要因から生じた言語的行動や非言語的行動が客観的な嘘の手がかりになると考えた。

近年には，DePaulo et al.（2003）が大規模なメタ分析を行い，嘘に関連する言語的行動および非言語的行動を扱った120本の研究と158種類の嘘の手がかりについて検討を行った。この報告では，客観的な嘘の手がかりとしての有効性を表す指標（効果量：d）を算出しており，効果がある（$d > .20$）と示された手がかりは25種類しかなく，その中でも中程度の効果（$d > .50$）があるものは2種類のみであった。すなわち，多くの行動は弱い程度でしか嘘と関連しておらず，ほとんどの言語的行動および非言語的行動は有効性をもつ嘘の手がかりとは言えないことが示された。例えば「視線を逸らす」という行動は，嘘の手がかりとして一般的に考えられているが，メタ分析では支持されていない（$d = .01$, DePaulo et al., 2003, p. 93）。視線に関する手がかりに限らず，嘘に関連があると信じられている言語的・

非言語的手がかりの多くは，真実と嘘を識別することができる有効性に乏しく，嘘の手がかりに関して抱かれている信念は誤っている傾向があるといえる。着目している手がかりが実際に嘘の指標であるかどうかという点において，嘘の主観的な手がかりは必ずしも正確であるわけではないけれども，真偽性の判断を方向づける際に重要な役割をもっているかもしれない（Vrij, Akehurst, & Knight, 2006）。そのため，他者が嘘をついているかどうかを考える必要性がある場合，着目した言語的行動および非言語的行動が客観的に有効であるかを議論するだけでなく，どのような理由に基づいてその行動に着目したのかというプロセスを検討することも重要である。

主観的な嘘の手がかり

人は真偽性判断を行う際に，特定の言語的行動や非言語的行動を根拠としているが，着目した行動は必ずしも有効な嘘の手がかりであるとは限らない。しかし，これらの手がかりは嘘かどうかを判断するという意思決定においては大きな役割を担っている。そこで，嘘の主観的な手がかりについての研究から蓄積された知見を整理していく。

嘘をつくときに表出される手がかりについては，世界規模の調査が実施されている。Global Deception Team（2006）は58ヵ国の2,320名の参加者に対して，嘘の指標となる手がかりを答えるように求めた。これらの回答をコーディングした結果，嘘の手がかりは103個のカテゴリーに分類された。最も頻繁に言及された手がかりは視線嫌悪（gaze aversion）であり，このことは他の研究と同様の結果であった（Strömwall & Granhag, 2003）。視線嫌悪は警察官や裁判官などの専門家の間でも共通して報告されているが，実際には，有効な嘘の指標ではないことが示されている（Sporer & Schwandt, 2007）。

嘘を必ず検出できるような信頼性のある行動はあまり明らかにされていないにも関わらず（DePaulo et al., 2003），人は真偽性を判断する際に，非言語的手がかりに着目する傾向がある（Vrij, 2008a）。ヨーロッパを中心として，警察官や裁判官，税関職員，看守などの虚偽検出の専門家と大学生のような素人が比較され，専門家も同じように嘘についての誤った信念を抱いていることが示されている（Akehurst, Köhnken, Vrij, & Bull, 1996; Strömwall, Granhag, & Hartwig, 2004）。さらに，嘘の主観的な手がかりを調べた研究では，素人も専門家も嘘と関連があると示されている以上の手がかりを嘘の指標として報告する傾向があり（Hartwig & Bond, 2011），とりわけ非言語的手がかりについての信念が割合を多く占めていた。しかし，Mann, Vrij, and Bull（2004）は言語的情報に注目したときの方が検出の精度において正確であることを主張しているが，このような言語的手がかりは嘘の手がかり信念の中にはあまり見られていない。嘘の主観的な手がかりをまとめると，緊張感や不安に関する印象を伴う非言語的行動についての手がかりが多く，これらは十分な妥当性をもつものではないことが明らかにされている。

日常場面における虚偽検出

これまでに得られた知見は，送り手が示す言語的行動および非言語的行動の観察のみに基づいている。嘘とは送り手が自分の利益を目的として，特定の情報について隠蔽する場合に使用されるコミュニケーションのひとつであり（Cole, 2001），現実場面において，これらの嘘をつく動機づけは様々である（DePaulo, Wetzel, Strenglanz, & Walker Wilson, 2003）。その結果，利己的な嘘をつく場合と利他的な嘘をつく場合では，嘘をついた後の感情や認知的負荷が異なるために，表出される行動が異なっているかもしれない。また，他者の言動に嘘があるのかどうかを判断する際に，コミュニケーションを利用して積極的に嘘の根拠となる手がかりを探索することは現実的に想定される手法である。具体的に言えば，嘘を検出する側は相手の反応から得られたフィードバックをもとに様子を判断し，疑いが生じれば嘘の手がかりを引き出そうと働きかけるプロセスを経験しているのである。しかしながら，多くの研究では，このような対人的な相互作用は制限されていることが多い。日常場面では，嘘を検出する際に必要と思われる情報を拡張することは可能であり，他者に対して抱いている疑念を確かめたり情報を整理したりすることは当然の行動と思われるけれども，多くの実験室研究では扱われることがない。

日常場面における虚偽検出の様相を調べた数少ない研究として，Park et al.（2002）は真偽判断を行う際の状況や検出方法を取り上げた。彼らは，情報の送り手の言語的・非言語的行動により，嘘を検出することができるという考えに疑問を呈していた。そのため，実験室と異なる状況では，第三者から得た情報や事前に知っていること，物的な証拠などを用いていると考えられ，虚偽研究で仮定される意思決定には限界があると指摘した。日常場面における真偽判断では，利用できる手がかりが言語的・非言語的行動に限られておらず，より有効性のある手がかりが存在している。Park et al.（2002）の調査の中で，言語的・非言語的行動のみを用いた虚偽検出は報告された嘘のわずか2%しか見られなかったことからも，このことは支持されている。

このような結果は，他者が本当のことを話しているのか，あるいは嘘をついているのかという真偽性を人はあまり問題視していないことを示唆している。実際に，日常生活の嘘を調べた日記研究（DePaulo, Kashy, et al., 1996; 村井, 2000）やコミュニケーションに対する不信を調べた研究（Gilbert, Krull, & Malone, 1990），虚偽知覚や印象形成を扱った研究（倉澤, 1993）では，真実バイアスが生じているために，他者の嘘を知覚することは困難であると主張している（Levine, 2014）。そのため，他者が嘘をついている可能性を知覚することが必要となってくる。嘘に関する主観的手がかりや客観的手がかりが観察可能であったとしても，送り手に対して疑念を感じていなければ，これらの手がかりの背後にある嘘を知覚することはできないだろう。そのため，嘘の手がかり信念を解釈する際に，他者が疑わしく感じているかどうかは重要な要因と考えられ，日常場面では，言語的・非言語的行動以外の要因によ

り猜疑心が喚起されているのかもしれない。

本研究の目的

文献レビューから示された通り，虚偽検出における言語的行動や非言語的行動の重要性には誤った思い込みが存在している。ある発言内容の真偽性を判断する場合，情報の送り手が示す言語的・非言語的行動のみに着目していることを前提にしているため，現実場面で行われる虚偽判断とは乖離している。多くの虚偽研究では，発言の送り手との関係性や既有知識を取り除いたデザインを用いている。しかしながら，真偽性判断を行うために送り手の言語的・非言語的行動に関する情報を利用する場合，十分な程度の行動を観察できるときにのみ有効であり，これらの行動よりも優先して利用されやすい手がかり（第三者から得た情報や物的証拠）があることが指摘されている（Park et al., 2002）。

同様に，Buller and Burgoon（1996）は，虚偽検出が行動に関する単純な観察に基づくものではないと主張した。他者が嘘をついているかもしれないと感じている場合，多くの情報を引き出したり確認したりするような能動的な働きかけを行うことにより，疑念を確証させる手がかりを得ることができるとして，相互作用が重要な要因になると考えられた。これらの研究を踏まえると，疑念を抱いているときに，嘘の手がかり信念は関連した行動への注意を促すといえる。その一方で，疑念が生じていない場合，他者が本当のことを話しているという認知バイアスにより，嘘の手がかり信念による影響は見られないだろう。したがって，抱いている疑念の程度と嘘の手がかり信念の間に結び付きがあると予想される。

本研究では，日常場面における虚偽検出に着目している。そして，嘘を見抜くときに用いる手がかりの種類や嘘と関連する手がかりについての信念を調べ，これらが嘘をついているかもしれないという疑念の程度により異なるかどうかを検討する。人は他者のメッセージが本当のものであると信じてしまうため（Levine, 2014），嘘に気付くことはかなり困難であると考えられる。しかしながら，嘘の可能性を知覚している場合，話し手が特定のトピックの会話を避けたり，落ち着きのない様子であったりすると，これらの手がかりが嘘と関連すると判断してしまうかもしれない。加えて，この傾向は嘘の手がかり信念と関係している可能性がある。虚偽検出の専門家は他者に対する猜疑心が高く，多数の手がかりを嘘の指標として報告することが示されている（Masip & Herrero, 2015）。本研究において，他者が嘘をついているかどうかの知覚は猜疑心尺度（滝口, 2017）や対人不信感尺度（岩崎, 2000）を用いて測定する。これらの変数はいずれも，相手が自分のことを騙そうとしているのではないかという疑い深さに関する構成概念であり，猜疑心や対人不信感が高い人ほど，特定の非言語的手がかりの利用や多くの嘘の手がかり信念をもっていることが予想される。

方　法

調査参加者

本調査は，関東地方の私立T大学において，心理学に関する講義中に行われ，大学生287名が参加した。調査は調査ソフトウェアであるQualtricsを用いてオンライン上で実施した。このうち，回答に不備や欠損があると判断した4名の回答者を除外した。加えて，オンライン調査は努力の最小限化が生じる可能性が高い環境であり，簡便である一方で注意資源の節約を招くことでデータの質をネガティブなものとさせることが指摘されている（三浦・小林, 2018）。そこで，本研究では回答時間に着目して，江利川・山田（2015）にならい，回答時間が極端に短い者を除外することにした。具体的には，回答時間の分布には歪みがあったため，各参加者の回答時間を自然対数に変換した後，平均値から−2SD以上離れている11名の回答を分析から除外した。その結果，272名（男性79名，女性193名，平均年齢20.24歳，*SD* = 2.31）が最終的な分析対象となった。

調査内容

本調査に先立ち，調査への参加は任意であり，途中で回答を止めても不利益は生じないことを文章にて説明した。これらを含む調査における注意事項を読み，調査参加者からの同意が得られた場合のみ，実際の調査項目へ進めるようにした。具体的には，以下に示す項目に回答するように求めた。

（1）日常場面の中で，他者に対してどのくらい疑念が生じやすいのかを把握するために，滝口（2017）が作成した猜疑心尺度を用いた。猜疑心とは，他者の言動が嘘に関連しているかもしれないと考える傾向のことである（Levine & McCornack, 1991）。そして，猜疑心が高いと，話し手にとって不都合なことを隠蔽していると考えるため，相手の正直さに関わる印象がネガティブになると指摘されている（Masip, Alonso, Herrero, & Garrido, 2016）。猜疑心尺度は，本当のことを話していない可能性を考慮する懐疑的態度（例：誰かと会話しているときに，その人が本当のことを話しているかどうか頻繁に疑問に思うことがある），他者の真実性を低く見積もるという否定的信念（例：ほとんどの人は基本的に正直であると思う）の16項目から構成されている尺度であった。各項目については，「1.全くあてはまらない」から「5.非常にあてはまる」の5件法で回答するように求めた。

（2）人に対する不信感を測定する尺度として，対人信頼感不信感尺度（岩崎, 2000）を用いた。他者に対する不信感は信頼感の下位因子のひとつとして捉えられている（天貝, 1997）。また，対人信頼感は養育されてきた各々の環境や，これまでに築いてきた対人関係，そして，その関係から生じる様々な経験によって育まれるものとして考えられており，対人不信感は対人関係におけるネガティブな側面を示している。対人信頼感不信感尺度（以降では，対人不信感尺度とする）には27項目が含まれており（例：人は，多少良くないことをや

っても自分の利益を得ようとする)，「1.そう思わない」から「5.そう思う」の5件法で回答を求めた。

（3）嘘と知覚したときの経験を収集するため，「直近で，ほかの人が自分に対して嘘をついていると感じた出来事」について思い出すように求めた。起こった出来事に関して，できるだけ多くの情報（例：誰がついた嘘であるのか，誰についた嘘であるのか，どのような状況で起こったのか）について記述するように指示を行った。その後，なぜその出来事が嘘であると感じたのかという検出方法についても自由記述にて回答を求めた。

（4）嘘をつくときに表出される手がかりに関する信念を測定するため，「人が嘘をついているとわかる手がかりは何だと思いますか」と尋ねた。嘘をつく人の特徴について調査を行うときには，手がかりを提示して嘘との関連の程度を求める方法（Vrij, Akehurst, & Knight, 2006）や回答者に余計な思考の介入を行わないで自由に嘘の手がかりを求める方法（Mann et al., 2004）が用いられている。本研究では，回答者が嘘の指標として信じている手がかりだけでなく，その信念の強さについても把握することを目的としているため，自由記述による調査方法を採用した。さらに，回答者が報告した各手がかりに対する信念の利用性を調べるため，その手がかりについての確信度を7件法で回答を求めた。

（5）嘘に関する信念に影響を及ぼす可能性から，嘘に対する道徳観，主観的な被欺瞞性，虚偽行動の表出に関する考えを尋ねる項目を独自に作成した。虚偽行動についての信念について調べた研究により，受刑者は専門家や学生とは異なった信念を報告しており，これらの信念が虚偽に関する客観的手がかりと一致する傾向にあることが明らかになっている（Granhag et al., 2004）。したがって，それぞれの判断者を取り巻く環境によって，形成される嘘と関連する手がかりについての信念は異なってくると考えられる。そのため，嘘を道徳的に良くないものと考えたり，嘘による被害を懸念していたりすれば，嘘をつくことに対して敏感であるかもしれない。学習という点でも，虚偽検出が成功したかどうかに関するフィードバックを受け取ることで，その手がかりの有効性を過大視することにつながるかもしれない。これらを踏まえて，嘘に対する道徳観（「あなたはどんな理由があっても嘘は悪いことだと思うか」），主観的な被欺瞞性（「あなたは騙されやすいほうだと思うか」），虚偽行動の表出に関する考え（「人は嘘をつくときに，言葉と行動のどちらに表われやすいと思うか」と「ほかの人とコミュニケーションを取るとき，言語的な側面と非言語的な側面のどちらに注意しているか」）の計4項目に対して，7件法の尺度にて回答を求めた。

結　果

本研究では，信念として抱いている嘘の手がかりと実際の虚偽知覚に関する経験の中で用いている手がかりの間の関係性について検討を行うことが主な目的であった。これらの2つの変数は自由記述式の質問により収集されているため，諸先行研究にしたがってコーディン

グを行い，それぞれの傾向について概観した。最初に，嘘の手がかりについての信念を検討するため，「人が嘘をついているとわかる手がかりは何だと思いますか」という質問に対する回答の分析を行った。これらの分類は，嘘の手がかりについての広範なメタ分析（DePaulo et al., 2003）に基づいて行われており，具体的には滝口（2020）にて報告された結果に基づいている。続いて，虚偽知覚を喚起させた出来事から嘘の手がかりを調べるため，「直近で，ほかの人が自分に対して嘘をついていると感じた出来事」の分析を行った。ここでは，日常場面で用いられる手がかりについての研究（Park et al., 2002）に基づいてコーディングを行い，回答者が言語的および非言語的手がかりを使用したのか，あるいは他の手がかりによって虚偽検出を行っていたのかどうかを分類した。最後に，特定のカテゴリーの言語的・非言語的手がかりについての信念を持っている人が，実際に虚偽知覚が喚起される場面で同様の手がかりを用いていたのかどうかを検討する。また，それぞれの傾向に関して，猜疑心や対人不信感，その他の変数（嘘に関する道徳観，主観的な被欺瞞性，虚偽行動の表出に関する考え）の関連性の違いについて調べた。

嘘の手がかりについての信念

本研究では，人が嘘をついているとわかる手がかりについて，最大3つまで自由に報告するように求めた。同様の手法を用いた研究では（Global Deception Research Team, 2006），思いつくものを全て記載するよう求めていたが，時間の制約により最大で3つまでとした。先行研究では，平均して男性は4.62個，女性は5.00個の信念を報告していたが，本研究の回答者が報告した信念の平均個数は全体で1.75個（SD = 0.77）であり，男性は1.76個（SD = 0.77），女性は1.75個（SD = 0.77）となった。先行研究の結果と異なり，本研究では男女による報告数に差は見られなかった（$t(270) = 0.13, p > .05, d = .17$）。

収集した回答の中で，「わからない」や分類不可のものを分析から除外したところ，最終的に465個の手がかりを分析の対象とした。これらの分析は滝口（2020）にて既出ではあったが，分析対象とするサンプルやコーディングを変更して，再度分析を行ったものとして報告した。コーディングの進め方に関して，DePaulo et al.（2003）のメタ分析で明らかにされた6つの大きなカテゴリーに新たに1つのカテゴリーを加えた全部で7つのカテゴリー（166種類）に基づいて，1名の評価者が最初に分類を行った。各カテゴリーは，「社会的行動」，「信用性行動」，「ポジティブ印象」，「緊張行動」，「逸脱的行動」，「直観的指標」，「その他の手がかり」となっており，最も頻繁に嘘の手がかり信念として報告されていた手がかりは「信用性行動」に属する信念（56.1％）であった。7つのカテゴリーの報告数に違いがあるかどうかを調べるためχ^2検定を行ったところ，有意差が認められた（$\chi^2(6) = 708.998, p < .01$）。具体的には，「信用性行動」に関する信念は他の全てのカテゴリーよりも有意に多く（ps < .01），「逸脱的行動」に関する信念は最も少なかった（$ps < .01$）。

Table 1 参加者が報告した手がかりの頻度（全ての手がかりが5%以上のものを抜粋）

	全ての手がかり（N = 465）			1つ目の手がかり（N = 265）		
手がかり名	度数	割合(%)	確信度	度数	割合(%)	確信度
視線移動	84	31.7	4.65	67	25.3	4.75
一貫性のない発言	36	13.6	5.11	30	11.3	5.07
視線嫌悪	35	13.2	4.58	24	9.1	4.58
姿勢変化	33	12.5	4.41	11	4.2	4.72
表情変化	31	11.7	4.74	27	10.2	4.78
感じの悪さ	27	10.2	4.57	11	4.2	4.36
不確かな発話	17	6.4	5.18	9	3.4	5.44
緊張感	15	5.7	5.06	4	1.5	5.50

続けて，全回答者の5%（13名）以上が報告した各種類の手がかりに着目したところ，最も頻繁に報告された信念は「視線移動（31.7%）」であり，続いて，「一貫性のない発言（13.6%）」，「視線嫌悪（13.2%）」，「姿勢変化（12.5%）」，「表情変化（11.7%）」，「感じの悪さ（10.2%）」，「不確かな発話（6.4%）」，「緊張感（5.7%）」の順に多く挙げられていた（Table 1）。これらの結果は先行研究と類似しており，視線や身体の動き，表情といった非言語的手がかりに関する信念が顕著に見られた。また，回答者が1つ目に記載した手がかりは，その回答者が抱いている最も関連が強くてアクセシビリティの高い嘘の手がかりと考えられる。そのため，これらの手がかりが虚偽検出に役に立つと強く認識していることが予想される。実際に，1つ目に報告した手がかりについての確信度は中点（4点）と比較すると，有意に高かった（M = 4.83, SD = 0.07, $t(264)$ = 11.30, p < .001, $95\%CI$ = 4.682–4.970）。つまり，最初に報告された手がかりは，嘘の主観的手がかりをより強く表していると考えられる。全体として，嘘の手がかりについての信念は，先行研究と類似して非言語的手がかりに関するものが多くを占めているように思われるが，5%以上の回答者に報告された手がかりの中には「感じの悪さ」のように，送り手の総合的な印象に関するものも見られた。この手がかりは先行研究ではあまり報告されていなかった手がかりであり，本研究の回答者である大学生，あるいは，日本人に特有な信念であるのかもしれない。また，これらの総合的な印象は情報の送り手を判断する評定者により評価されるものであり（DePaulo et al., 2003），送り手自身の信用されやすさと判断者の信用しやすさといった要因と関連すると考えられる。メタ分析では，これらの曖昧な印象や感じの良さなどの総合的な印象に関する信念が，判断するために用いられる傾向が高いことが示されている（Hartwig & Bond, 2011）。他方で，個別の手がかりの代表である視線に関する手がかりは効果的な指標にはならないにも関わらわず，最も多く報告されているだけでなく，アクセシビリティの高い手がかりであるため，信念としては非常に頑健であることが伺える。

嘘かもしれないと感じた出来事の特徴

参加者に対して，「直近で，ほかの人が自分に対して嘘をついていると感じた出来事」についての報告を求めたところ，173名（60.3%）が体験した内容について記述を行った。そのうち，4名の回答は記述が不完全であったため除外し，最終的に169名の回答をコーディングの対象とした。

コーディングに関しては，Park et al.（2002）を参考にして行った。具体的には，①体験した出来事のタイミング，②嘘をついていると感じた相手との関係性，③嘘と感じたときの手がかり，④嘘と確証するまでに必要とした時間，⑤嘘の内容，という5つのカテゴリーについてのコーディングを行った。体験した出来事のタイミングは，調査時に「直近」という用語を提示したために，明確に記載されているものは4件のみであった。回答者が共通した認識で回答を行っていたことが考えられるため，この項目に関するコーディングは分析から除外した。同様に，嘘の内容に関して，調査した項目は嘘と感じたときの出来事であり，実際に嘘であったかどうかに関する把握ができておらず，内容の判断が困難であったため分析から取り除いた。残った3つのカテゴリーについて，2名の評価者が独立して，それぞれの回答内容の25％について分類し，その時点での評価者間の信頼性係数（κ係数）を算出した。評価者間の一致が十分に認められたことが確認できた場合，不一致のある項目を2名の話し合いにより解決した後，1名の評価者が残りの全ての内容のコーディングを行うことにした。

最初に，関係性のタイプに関するコーディングは，記載のないもの，友人，家族の一員，恋人（以前の恋人を含む），同僚や専門家，クラスメイト，知人，その他に分類した。関係性のコーディングに対する評価者間の信頼性は非常に高かった（κ = .91）。続いて，嘘と感じたときの手がかりは，記載のないもの，第三者からの情報，物的情報，直接的な問答による自白，相手の不注意による自白，そのときの言語的行動や非言語的行動，事前知識との非一致，手法の組み合わせ，直観的感覚，その他に分類した。回答の中に1つ以上の手法が反映されている場合には，手法の組み合わせとしてコーディングを行い，その後，その組み合わせを構成するそれぞれのカテゴリーにもコーディングを行った。これらの手がかりに対する評価者間の一致はκ = .74であった。最後に，嘘と知覚するまでの時間について，記載のないもの，言動に対して即時的，出来事が起こった以降に分類したところ，信頼性係数はκ = .82であった。

現実場面において，人がどのようにして他者が嘘をついていると認識するのかの質問紙に対する自由記述を分析した。大学生は他者との相互作用において，嘘をついているのではないかと感じたときの相手は友人（51.8％）が最も頻繁であると報告していた（Table 2）。日常的な嘘についての研究を踏まえると（村井, 2000），大学生は友人との相互作用が最も多いため，そのことに伴って友人の嘘を知覚する機会も多かったのかもしれない。さらに，嘘と知覚したときの手がかりに関しては，手法の組み合わせ（28.0％），直観的感覚（20.2％），

Table 2 虚偽知覚に関する経験における関係性（*N* =169）

項目	度数(人)	割合(%)
関係性[1]		
友人	87	51.8
家族	14	8.3
知人	12	7.1
恋人（元恋人）	8	4.8
同僚	3	1.8
クラスメイト	3	1.8
その他	15	8.9

[1] 関係性を判断する記述がなかったものは表に含めていない

Table 3 虚偽知覚に関する経験における手がかり

	全体コーディング（*N* =169）		分解後コーディング（*N* =217）	
項目	度数(人)	割合(%)	度数(人)	割合(%)
手法の組み合わせ	47	28.0	－	－
直観的感覚	34	20.2	48	22.1
相手の非言語的行動	20	11.9	45	20.7
事前知識との非一致	13	7.7	27	12.4
第三者からの情報	12	7.1	13	6.0
物的な情報	8	4.8	15	6.9
相手の言語的行動	5	3.0	19	8.8
相手の不注意による自白	3	1.8	3	1.4
直接的な問答による自白	1	0.6	3	1.4
直接的な問答なしの自白	1	0.6	1	0.5
その他	25	14.3	43	19.8

非言語的行動（11.9%），事前知識との非一致（7.7%），第三者からの情報（7.1%）の順に多く報告されていた（Table 3）。先行研究の中では，言語的行動および非言語的行動がわずか4個（2.1%）しか見られなかったが，一方で，本研究における回答は25個（14.9%）であった。このことは質問内容の違いにより生じたのかもしれない。嘘であることが実際にはっきりと特定できるときに，実験室研究では扱うことのできない立証性の高い手がかりが報告されている。しかしながら，嘘かどうかわからない場合，緊張や不安と結び付くような言動から嘘の可能性を喚起している（Sporer & Schwandt, 2007; Vrij, 2008a）。したがって，嘘をついていることを示すと参加者が信じているような言語的および非言語的手がかりに着目していたのかもしれない。

また，真偽性に関する判断が複数の言語的および非言語的手がかりを用いて推察されるように（Hartwig & Bond, 2014），他者の嘘を認識する段階でも，単独の手がかりよりも複数

の手がかりが組み合わさって嘘の可能性を喚起しているかもしれない。そのため，手法の組み合わせとして用いた手がかりを再度分離してコーディングしたところ，169個の虚偽知覚を説明するために全部で217個の手がかりが確認された（Table 3）。組み合わせの際に用いられていた手がかりを考慮すると，直観的感覚（22.1%），非言語的行動（20.7%），事前知識との非一致（12.4%）言語的行動（8.8%）を通して，他者に対する疑念が喚起される傾向にあった。言語的行動や非言語的行動は単独の手がかりのみで用いられた場合と比べると，組み合わせの中で使用された手がかりの数は39個となった。興味深いことに，言語的行動は単独としてはあまり嘘を喚起させていない一方で，他の手がかりと組み合わさると約3倍も嘘を喚起させる可能性が高いと示唆されていた。これらの結果から，客観的な手がかりをもとに嘘の可能性を知覚し，相手の言語的行動および非言語的行動を注意深く観察することを通して嘘を確信しているというプロセスが想定される。自由記述の内容の中にも，相手が嘘をついているかもしれないと感じて，実際に問いかけてみると嘘に関連した言語的行動が表出された，という報告も見られた。言語的行動や非言語的行動は，嘘をついているかどうかに関わらず観察できる情報であり，対象に対する疑いが喚起されていない状況では真偽性を方向づける手がかりとはならないのかもしれない。

嘘の手がかりに関する信念と虚偽知覚の中で用いられる手がかりの関係

2つの自由回答式の質問に対する反応の結果から，人は非言語的行動についての手がかりに関する信念を多く報告する傾向にあったが，実際の虚偽知覚を引き起こす要因は非言語的行動のみに限らず，情報の送り手との直接的な相互作用を含んだ客観的な手がかりを用いていることが示された。本研究の結果は，日常生活における虚偽検出の手法を調べたPark et al.（2002）の結果と部分的に重なるところがあるものの，完全に一致するものではない。とりわけ，実際に嘘を喚起させるような言語的・非言語的手がかりを報告した回答者が3割近く見られたことから，特定の言語的・非言語的行動によって嘘に関する気付きが生み出されている可能性が考えられる。しかし，本研究ではこれらの手がかりをどのように用いたのかに関する詳細的な記述を求めていなかったため，手がかりに着目した時点における虚偽知覚の生起に関しては断定することができない。加えて，本研究における回答は質的なデータであるため，例えば，視線に関する信念をもっていることが実際の場面でも使用されていると結び付けることは難しい。総合的に考えると，ほとんどの回答者は，言語的手がかりや非言語的手がかりに基づいた検出を行っておらず，このことが嘘の手がかりに対して抱いている信念による影響かどうかを決定するには至っていない。

他方で，メタ分析の結果から，客観的な嘘の手がかりがあることよりも，判断者が嘘を知覚できるような手がかりがあることの方が強く真偽性判断と結び付いていると示されている（Zuckerman et al., 1981）。実際の意思決定では，意識では捉えることのできない手がかり

Table 4　回答者の5%以上から得られた主観的手がかりの利用係数

手がかり名	本研究の割合	メタ分析の研究数[2]	サンプル数[2]	利用係数[2]	95% CI[2]	
視線移動[1]	31.7	19	1178	-.15 **	-.21	-.08
一貫性のない発言	13.6	7	563	-.34 **	-.45	-.22
視線嫌悪[1]	13.2	5	202	.28 **	.13	.41
姿勢変化	12.5	3	58	-.10	-.36	.18
表情変化	11.7	3	164	.18	-.19	.50
感じの悪さ	10.2	13	987	-.35 **	-.46	-.23
不確かな発話	6.4	7	502	.49 **	.23	.69
緊張感	5.7	15	1208	.30 **	.17	.42

利用係数の有意水準：$^{**}p < .001$

[1] 視線移動はアイコンタクトの逆転項目、視線嫌悪は視線を逸らすことに対応させた

[2] これらの数値はHartwig & Bond (2011)から抜粋した

の処理を含んでいるため，意識していないような直観的かつ非明示的な処理が引き起こされているかもしれない（Gigerenzer, 2007）。嘘を判断するための手がかりと嘘の実際の手がかりの関連性を検討する方法として，判断者が送り手の行動を解読するという心理プロセスを仮定したレンズモデルを用いる場合がある。このレンズモデルを利用した研究では，判断者が特定の手がかりを用いて送り手の真偽性を判断するときの傾向の強さを，手がかりの知覚と真偽判断の相関係数により表している。Hartwig and Bond（2011）は，レンズモデルを虚偽判断に適用し，計 81種類の嘘に関する手がかりとそのときの真偽判断について検討した。そして，66種類の手がかりが有意に虚偽知覚と関連していることを示した（Hartwig & Bond, 2011, pp. 649-650）。これらの関連の程度を意味する相関係数の高さはその手がかりと嘘の結び付きの強さを表しており，ある手がかりの相関係数が負の値のとき，判断者はその手がかりから嘘と判断する傾向にあると考えられる。このことから，本研究の回答者が報告した嘘の手がかりについての信念が嘘と結び付きが強いものであるとすれば，これらの特徴的な信念と対応する相関係数が高いことを明らかにすることにより，間接的に虚偽知覚を引き出すような影響をもっている可能性があると示すことができると思われる。

したがって，本研究の回答者（5%以上）が抱いている嘘の信念として，「視線移動（31.7%）」，「一貫性のない発言（13.6%）」，「視線嫌悪（13.2%）」，「姿勢変化（12.5%）」，「表情変化（11.7%）」，「感じの悪さ（10.2%）」，「不確かな発話（6.4%）」，「緊張感（5.7%）」の8つを取り上げ，メタ分析（Hartwig & Bond, 2011）で報告されている虚偽知覚との関連の強さの指標である利用係数（r_{per}）を調べた（Table 4）。これらの手がかりの相関係数の絶対値は.10から.49の範囲にあり，最も嘘と強い関連をもっている手がかりは「不確かな発話」であった。その他の手がかりは弱い相関を示す程度にとどまっていた。なお，Hartwig and Bond（2011）のメタ分析における中央値はr = .25であり，手がかりの利用係数は全体的に低かった。この結果を踏まえると，嘘の信念として抱かれている手がかりは実験室場面では

利用されていないのかもしれない。

虚偽知覚における個人差の検討

前節では，レンズモデル分析の結果を用いて，虚偽判断を行うときに実際に利用している手がかりと虚偽判断のときに役立つと考えている手がかりを比較した。これらの2つの手がかりの間には正の相関があると示されており（Hartwig & Bond, 2011），ある言語的・非言語的行動が嘘に関連していると認識していることにより，実際に判断基準として用いる可能性が高くなると考えることができる。一方で，警察官や裁判官などの虚偽検出の専門家は他者の真偽性を判断する機会が多く，嘘を逃してしまうことに関して懸念している。そのため，相手が嘘をつくだろうという見込み（嘘バイアス）が大きい。この点に関しては，猜疑心を測定する尺度（Generalized Communicative Suspicion Scale; Levine & McCornack, 1991）における得点が専門家ではない一般人に比べて高いことが確認されている（Masip et al., 2015）。猜疑心が高い人は，実際の真偽性と独立して他者の供述を嘘だと判断しやすい傾向にあるため，嘘を前提とした情報探索を行っていることが影響しているのかもしれない。さらに，虚偽経験に関する自由記述から，相手の嘘を知覚しているかどうかにより，用いている手がかりが異なる可能性が示唆された。

このような背景を踏まえると，嘘の可能性を推定する傾向は，他者に対する猜疑心や不信感といった個人特性と関連すると考えられる。猜疑心の高さと嘘を喚起する手がかりの関係について，嘘の手がかりを1つも報告しなかった人よりも何らかの嘘を報告した人の方が猜疑心は高いと予想される。また，対人不信感は他者を信用しない傾向であることから，嘘かどうかに注意を向ける必要がないために報告された手がかりとの関連は見られないだろう。

以上の点を検証するために，最初に各尺度がもつ因子構造の妥当性を調べる確証的因子分析を行った。因子構造のあてはまりの良さを示す適合度指標は，猜疑心尺度に対して $\chi^2 = 51.78$, $df = 26$, $p < .05$, CFI = .944, RMSEA = .062, AIC = 90.856，対人不信感に対して $\chi^2 = 335.61$, $df = 249$, $p < .01$, CFI =.952, RMSEA = .039, AIC = 555.834であった。これらの値に基づき，適合度指標は概ね許容できる値であると判断した。続いて，嘘と感じた経験の報告の有無により，猜疑心の程度が異なるかどうかを調べた。その結果，予想した通り，他者に対する欺瞞性を認知していた回答者（$M = 27.3$, $SD = 5.34$）のほうが，何も報告しなかった回答者（$M = 24.5$, $SD = 5.24$）よりも猜疑心が高かった（$t(270) = 4.18$, $p < .01$, $d = .52$）。しかし，対人不信感についても有意な差が見られており，他者に対する不信が高い人は虚偽知覚に関連した手がかりを多く報告していた（$t(270) = 4.46$, $p < .01$, $d = .55$）。なお，対人不信感は，嘘に対する道徳観や主観的な被欺瞞性，虚偽行動の表出に関する考えを共変量とした分析を行ったとしても，有意なままであった（$ps < .05$）。

考　察

本研究は，多くの虚偽検出研究が想定しているとされる，判断を行う対象となる情報の送り手が示す言語的・非言語的行動のみに基づいて他者の嘘を見抜いているという顕在的かつ潜在的な前提に端を発している。それゆえに，実験デザイン上の問題で制限されている情報に捉われることなく，日常の中で行っている虚偽判断についての理解を深めることにより，素朴な虚偽知覚を調べることを目的とした。このような問いを踏まえ，人が抱いている嘘の手がかりについての信念と日常場面で虚偽知覚を引き起こす手がかり，そして，着目された手がかりと個人特性の関係について検討した。

人が嘘をついているとわかる手がかりは，本当のことを話しているときとは異なる行動を表出するという考えに基づいている（Bond & DePaulo, 2008; Sporer & Schwandt, 2006）。そして，これらの多くの行動に関する信念は，虚偽検出における主観的な手がかりとして研究されている。例えば，世界規模の研究（Global Deception Research Team, 2006）によって，視線嫌悪と嘘が結び付いているという信念は最も頻繁に報告されていた手がかりであることが明らかにされた。本研究における自由回答式の調査においても，言語的行動よりも非言語的行動の方が嘘の関連を示しているものが多いと認識していることを支持する結果が得られた。非言語的行動に着目する傾向は頑健であり（Bogaard, Meijer, Vrij, & Merckelbach, 2015），この背景には嘘をついているときには不安を感じ，その不安が行動に表われるということを想定しており，簡単に処理を行うことのできる手がかりであるかもしれない。しかし，実際には非言語的手がかりよりも言語的手がかりの方が嘘の指標として妥当性があると明らかにされつつある（Masip & Herrero, 2015）。

本研究の回答者が報告した嘘の手がかりについての信念は，以下の2点において興味深い結果と考えられる。1つ目に，先行研究と比較した場合，視線行動や姿勢変化といった非言語的手がかりは共通しているが，感じの悪さのような統合的な印象が報告された点は異なっていた。このような全体的な印象は，言語的および非言語的行動の小さな変化が積み重なったものと思われるが，これらの構成要素を個別的に検討した研究は見られない。他方で，全体的な印象は個々の手がかりよりも有用な手がかりであるという知見が報告されているため（DePaulo et al., 2003），統合的な印象が虚偽判断にとって十分な予測因子になる可能性が考えられる。それゆえに，この印象に関する将来的な研究が期待される。

2つ目に，顕著に多く報告された嘘についての手がかりを調べると，これらの手がかりに対する確信度は有意に高いものであった。その手がかりに確信的であることは，その手がかりと嘘との結び付きの間に強い連合が存在していると考えられる。確信度の高い手がかりはすべてが真偽性判断のときに利用されやすいものではないが，虚偽決定という枠組みでは頻繁に用いられやすい手がかりであった。このことから，嘘の手がかりに関する信念が活性化することで，その信念と一致した手がかりを探索するようになっていたのかもしれない。実

際の虚偽検出を考慮したとしても，この可能性は十分に考えられる。

本研究において，実際の日常場面で使用している手がかりを調べるため，回答者が経験した嘘を直接的に尋ねており，その際に用いた詳細な手がかりや嘘をついた相手との関係性を尋ねる自由回答式の質問を用いた。これらの質問に対する回答をコーディングした結果，複数の手がかりを組み合わせて，他者の虚偽を認識していることが示された。嘘を見抜いたときの出来事に関する類似した研究では（Park et al., 2002），嘘を検出するときの手法について，送り手の言語的行動や非言語的行動に基づいて判断することはきわめて少なかったと報告された。その代わり，第三者からの情報や物的証拠を基準としたメッセージ内容の一致など，より客観的な指標が利用されていた。加えて，嘘をつかれた直後に嘘を見抜くことは滅多にみられず，1時間やそれ以上の時間が経ってから気付くものが多かった。一方で，本研究の結果は組み合わせを細分化してみると，非言語的行動を通して嘘かもしれないと気付いた事例（20.7％）が多かった。また，直観的に嘘を感じたと報告する回答者も高い割合で見られており，虚偽検出の手法とは異なり，曖昧な指標が用いられていると示された。この違いは主に手がかりの知覚に関係して表面化されているのかもしれない。信念や動機，判断についての知識が正確ではないことがあると実証されているが（Fiske & Taylor, 2008），真偽性判断に関する研究では，実際に妥当性のある嘘の手がかりが観察可能であるかという点より，観察者にとって嘘をついている可能性を喚起させる役割をもつ手がかりが存在するかどうかが重要であることを指摘している（Vrij, Edward, & Bull, 2001）。それだけでなく，人は他者とコミュニケーションをとる際に，不確実な印象を受けると，その相手が嘘をついているのではないかという疑念を抱く。したがって，虚偽知覚を喚起させる手がかりに着目した場合，言語的手がかりや非言語的手がかりの実際の虚偽性を推定するよりも，知覚に対してどのくらい影響を及ぼすかを知ることが必要になると考えられる。日常場面の結果を踏まえると，他者との相互作用の中では単に特定の手がかりのみによって虚偽に対する知覚が喚起されるのではなく，相手の印象や行動などの複数の情報を通して嘘を知覚していると考えられる。このことは相互作用を前提とした古典的な虚偽に関する理論と同じ立場を取っている（Buller & Burgoon, 1996）。

真偽性判断を行う際に，ヒューリスティックスを多用することで判断の正確性が制限されてしまうかもしれないが，虚偽検出の正確性と虚偽検出者の意思決定は必ずしも対応しているものではない。この点は，自己報告による嘘の手がかりと実際の嘘の手がかりの間の不一致だけではなく，虚偽判断そのものが意識的にはアクセスできないような直観により引き起こされることからも十分に考えられる（Albrechtsen, Meissner, & Susa, 2009）。直観による虚偽判断のプロセスが正確であると示唆されているが（ten Brinke, Stimson, & Carney, 2014），知見を再現することに関する難しさや虚偽に関する認識の相違があるため，実証的知見を重ねることが望まれる。その一方で，実際の真偽性とは関係なく，虚偽の可能性を喚

起させるような知覚上の手がかりについて明らかにすることも重要である。嘘の手がかりの中には，身体変化にみられるように，身体の動きが多いほど嘘であると判断される場合と身体の動きが少ないほど嘘であると判断される場合のような反対方向の予測行われるものもある。同じ手がかりであっても，判断に関する知覚の方向性が異なる手がかりは複数の研究で確認されている。さらに，人の虚偽判断に関する信念は，否定的感情の経験や素朴な道徳性に基づくと示されており（太幡, 2020），嘘に関する前提を理解することによって，嘘を知覚する手がかりについて詳細的に検討することができるだろう。

では，嘘の手がかりについての直観的な考えは，嘘についての実際の行動上の手がかりとどの程度の重なりをもっているのだろうか。先行研究により，コミュニケーションを図る相手の実際の真偽性についてのフィードバックの欠如が，経験から得られる適切な規則の学習を妨げているということが示唆されている（Granhag, Anderson, Stromwall, & Hartwig, 2004; Hartwig, Granhag, Stromwall, & Anderson, 2004; Vrij & Semin, 1996）。実際の意思決定は考えられている以上に欠点が少ないという知見を整理すると，虚偽判断についてのフィードバックの役割を新しい視点から解釈する必要があるかもしれない。おそらく，欺瞞的な態度についての直観的な評価や疑心があることは，真偽性についてのフィードバックを（典型的な実験室研究のパラダイムによっては捉えられていない情報ソースを通して）受けているかもしれない（Park et al., 2002）。そのようなフィードバックを含めて，実際に判断者の手がかりに対して抱いている信念から知覚上の手がかりの強さを示すことは，将来的な研究に対する問いとなるだろう。

引用文献

Akehurst, L., Köhnken, G., Vrij, A., & Bull, R. (1996). Lay persons' and police officers' beliefs regarding deceptive behavior. *Applied Cognitive Psychology, 10*, 461-471.

Albrechtsen, J. S., Meissner, C. A., & Susa, K. J. (2009). Can intuition improve deception detection performance? *Journal of Experimental Social Psychology, 45*, 1052–1055.

天貝 由美子. (1997). Self-esteemを規定する要因としての信頼感―その生涯発達的変化―. カウンセリング研究, *30*, 103-111.

Backbier, E., Hoogstraten, J., & Terwogt-Kouwenhoven, K. M. (1997). Situational determinants of the acceptability of telling lies. *Journal of Applied Social Psychology, 27*(12), 1048–1062.

Bogaard, G., Meijer, E., Vrij, A., & Merckelbach, H. (2016). Strong but wrong: Beliefs about verbal and non-verbal cues to deception. *PLoS One, 11*, e0156615.

Bok, S. (1978). *Lying: Moral choice in public and private life*. New York: Vintage Books.

Bond, C. F., Jr., & DePaulo, B. M. (2006). Accuracy of deception judgments. *Personality and*

Social Psychology Review, 10, 214–234.

Buller, D. B., & Burgoon, J. K. (1996). Interpersonal deception theory. *Communication Theory, 3*, 203–242.

Cole, T. (2001). Lying to the one you love: The use of deception in romantic relationships. *Journal of Social and Personal Relationships, 18*, 107–129.

Colwell, L. H., Miller, H. A., Miller, R. S., & Lyons, P. M., Jr. (2006). U.S. police officers' knowledge regarding behaviors indicative of deception: Implications for eradicating erroneous beliefs through training. *Psychology, Crime & Law, 12*, 489–503.

DePaulo, B. M., Kashy, D. A., Kirkendol, S. E., Wyer, M. M., & Epstein, J. A. (1996). Lying in everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology, 70*, 979–995.

DePaulo, B. M., Lindsay, J. J., Malone, B. E., Muhlenbruck, L., Charlton, K., & Cooper, H. (2003). Cues to deception. *Psychological Bulletin, 129*, 74–118.

DePaulo, B. M., Morris, W. L., & Sternglanz, R. W. (2009). When the truth hurts: Deception in the nature of kindness. In A. Vangelisti (Ed.), *Feeling hurt in close relationships* (pp. 167–190). New York, NY: Cambridge University Press.

DePaulo, B. M., Stone, J. I., & Lassiter, G. (1985). Telling ingratiating lies: Effects of target sex and target attractiveness on verbal and nonverbal deceptive success. *Journal of Personality and Social Psychology, 48*, 1191–1203.

Ekman, P., & Friesen, W.V. (1969). Nonverbal leakage and clues to deception. *Psychiatry, 32*, 88–106.

江利川 滋・山田 一成. (2015). Web 調査の回答形式 の違いが結果に及ぼす影響―複数回答形式と個別強制選択形式の比較― 社会心理学研究 *31*, 112– 119.

Fiske, S. T., & Taylor, S. E. (2008). *Social cognition: From brains to culture*. Boston, MA: McGraw-Hill.

Gigerenzer, G. (2007). *Gut feelings: The intelligence of the unconscious*. New York, NY: Viking.

Gilbert, D. T., Krull, D., & Malone, P. (1990). Unbelieving the unbelievable: Some problems in the rejection of false information. *Journal of Personality and Social Psychology, 59*, 601–613.

Global Deception Research Team. (2006). A world of lies. *Journal of Cross-Cultural Psychology, 37*, 60–74.

Granhag, P.A., Andersson, L.O., Strömwall, L.A., & Hartwig, M. (2004). Imprisoned knowledge: Criminals' beliefs about deception. *Legal and Criminological Psychology, 9*, 103–119.

Hartwig, M., & Bond, C. F., Jr. (2011). Why do lie-catchers fail? A lens model meta-analysis of human lie judgments. *Psychological Bulletin, 137*, 643–659.

Hartwig, M., & Bond, C. F., Jr. (2011). Lie detection from multiple cues: A meta-analysis. *Applied Cognitive Psychology, 28*, 661–676.

Hartwig, M., Granhag, P.A., Strömwall, L.A., Wolf, A., Vrij, A. & Roos af Hjelmsäter, E. (2011). Detecting deception in suspects: Verbal cues as a function of interview strategy. *Psychology, Crime & Law, 17*, 643–656.

廣田 昭久・小川 時洋・松田 いづみ・高澤 則美. (2009). 隠匿情報検査時に生じる自律神経系反応の生起機序モデル. 生理心理学と精神生理学, *27*, 17–34.

岩崎 和美. (2010). 対人信頼感におけるパーソナリティの影響について―『原子価論』に基づく実証的研究―. 奈良大学大学院研究年報, *15*, 57–68.

Kraut, R.E., & Poe, D.B. (1980). Behavioral roots of person perception: The deception judgments of customs inspectors and laymen. *Journal of Personality and Social Psychology, 39*, 784–798.

倉澤 寿之. (1995). 嘘の知覚における初期疑惑の成立について. 白梅学園短期大学紀要, *31*, 143–151.

Lakhani, M., & Taylor, R. (2003). Beliefs about the cues to deception in high-and low-stake situations. *Psychology, Crime & Law, 9*, 357–368.

Levine, T. R., & McCornack, S. A. (1991). The dark side of trust: Conceptualizing and measuring types of communication suspicion. *Communication Quarterly, 39*, 325–340.

Levine, T. R. (2014). Truth-default Theory (TDT): A Theory of Human Deception and Deception Detection. *Journal of Language and Social Psychology, 33*, 378–392.

Mann, S., Vrij, A., & Bull, R. (2004). Detecting true lies: Police officers' ability to detect deceit. *Journal of Applied Psychology, 89*, 137–149.

Marksteiner, T., Reinhard, M.-A., Dickhäuser, O., & Sporer, S. L. (2012). How do teachers perceive cheating students? Beliefs about cues to deception and detection accuracy in the educational field. *European Journal of Psychology of Education, 27*, 329–350.

Masip, J., & Herrero, C. (2015). Police detection of deception: Beliefs about behavioral cues to deception are strong even though contextual evidence is more useful. *Journal of Communication, 65*, 125–145.

Masip, J., Alonso, H., Herrero, C., & Garrido, E. (2016). Experienced and novice officers' generalized communication suspicion and veracity judgments. *Law and Human Behavior, 40*, 169–181.

松田 いづみ. (2016). 隠すことの心理生理学：隠匿情報検査からわかったこと. 心理学評論,

59, 162-181.

三浦 麻子・小林 哲郎. (2018). オンライン調査における努力の最小限化が回答行動に及ぼす影響. 行動計量学, *45*(1), 1–11.

村井 潤一郎. (2000). 青年の日常生活における欺瞞. 性格心理学研究, *9*, 56-57.

Park, H. S., Levine, T. R., McCornack, S. A., Morrison, K., & Ferrara, M. (2002). How people really detect lies. *Communication Monographs, 69*, 144-157.

Sporer, S.L., & Schwandt, B. (2007). Moderators of nonverbal indicators of deception: A meta-analytic synthesis. Psychology, *Public Policy, and Law, 13*, 1–34.

Stiff, J.B., & Miller, G.R. (1986). "Come to think of it..." : Interrogative probes, deceptive communication, and deception detection. *Human Communication Research, 12*, 339–357.

Strömwall, L. A., & Granhag, P. A. (2003). How to detect deception? Arresting the beliefs of police officers, prosecutors, and judges. *Psychology, Crime & Law, 9*, 19–36.

Strömwall, L.A., Granhag, P.A., & Hartwig, M. (2004). Practitioners' beliefs about deception. In P.A. Granhag, & L.A. Strömwall (Eds.), *Deception detection in forensic contexts* (pp.229–250). Cambridge, England: Cambridge University Press.

太幡 直也. (2020). 嘘をつくことに対する認識尺度の作成. 心理学研究, *91*, 34-43.

滝口 雄太. (2017). 日本語版GCS尺度の作成の試み. 東洋大学大学院紀要, *54*, 77-89.

滝口 雄太. (2020). 日常生活における嘘の知覚に関する基礎研究. 東洋大学大学院紀要, *56*, 73-95.

Taylor, R., & Hick, R. F. (2007). Believed cues to deception: Judgments in self-generated trivial and serious situations. *Legal and Criminological Psychology, 12*, 321–331.

ten Brinke, L., Stimson, D., & Carney, D. R. (2014). Some evidence for unconscious lie detection. *Psychological Science, 25*, 1098 –1105.

Vrij, A. (2008a). *Detecting lies and deceit: Pitfalls and opportunities* (2nd ed.). New York, NY: Wiley.

Vrij, A. (2008b). Nonverbal dominance versus verbal accuracy in lie detection: A plea to change police practice. *Criminal Justice and Behavio*r, 35, 1323–1336.

Vrij, A., Akehurst, L., & Knight, S. (2006). Police officers' , social workers' , teachers' and the general public' s beliefs about deception in children, adolescents and adults. *Legal and Criminological Psychology, 11*, 297–312.

Vrij, A., Edward, K., & Bull, R. (2001). Police officers' ability to detect deceit: The benefit of indirect deception detection measures. *Legal and Criminological Psychology, 6*, 185–196.

Vrij, A., Granhag, P. A., & Porter, S. B. (2010). Pitfalls and opportunities in nonverbal and verbal lie detection. *Psychological Science in the Public Interest, 11*, 89-121.

Vrij, A., & Semin, G. R. (1996). Lie experts' beliefs about nonverbal indicators of deception. *Journal of Nonverbal Behavior, 20*, 65-80.

Zuckerman, M., DePaulo, B. M., & Rosenthal. R. (1981). Verbal and nonverbal communication of deception. ln L. Berkowitz (Ed.). *Advances in experimental social psychology*, Vol. 14 (pp. 1-57). New York. NY: Academic Press.

What cues lead to perceive lies: mismatch between beliefs about cues to deception and cues used in communication

TAKIGUCHI, Yuta

Abstract:

In most of deception researches, materials with senders who tell the truth or lie have been typically used. These generally include verbal and non-verbal behaviors senders display, and observers receive such information and judge their veracity, accordingly. They have reflected the assumption that liars feel anxious or nervous and therefore, liars show some indicators such as gaze aversion. The current study considered situations where people perceive through real communication. Specifically, we aimed to provide basic knowledge which doesn't restrict on verbal and non-verbal cues. Moreover, we examined whether cues leading to suspicion might be influenced by beliefs about cues to deception people held, and/or based on personality differences related to deception detection. 272 university students participated in this study, and completed an open-ended questionnaire concerning beliefs about cues to deception and experiences on the perception of lies. In accordance with previous research, our participants reported more non-verbal cues than verbal cues. Interestingly, unlike a study conducted worldwide, "friendliness" was indicated by 11.8% of our respondents, and this was indicated by multiple cues. Analyzing descriptions of experience-related to lies showed that instinctive thoughts, non-verbal behaviors, and discrepancies between information from third party and what observers see would potentially contribute to the perception of lies. The presence of verbal and non-verbal behaviors might help predict suspiciousness and lies, and this view was supported by a study showing the effectiveness of utility coefficient associated with beliefs about cues to deception.

Keywords: lie, suspicion, beliefs about cues to deception, cues to perceive lie